

第2章 基本的な事項

1 基本理念

第2次基本計画で掲げる、2050年に実現を目指す札幌の環境の将来像である、次世代の子どもたちが笑顔で暮らせる持続可能な都市「環境首都・SAPPORO」と、SDGsの理念である“誰一人取り残さない”持続可能な社会の実現のために、環境教育・環境学習の基本理念を以下のとおり定めます。

みらいを想い、みんなを思い、真剣に考え行動できる環境市民を育てます

これからもずっと安心して暮らしていくためには、一人一人が環境について真剣に考えて、行動する必要があります。そこで、今のことだけではなく未来のことを想像し、自分のことだけではなく周りにはいるみんなのことを思い、そして、生き物同士のつながりなどの地球環境のことを真面目に考えて、やるべきことを自ら判断し、積極的に取り組む人「環境市民」を、学びを通して増やすことを基本理念としました。

2 目指す将来像

本方針による各種の取り組みが成果を上げ続けることによって、次のような社会が実現されることを目指します。

- ◎ 市民が「持続可能な都市²とは何か」について理解している。
- ◎ 市民が札幌の環境の良さを実感し、自ら環境を改善する行動を選択し、周囲の人たちの行動にも良い影響を与えている。
- ◎ 環境配慮行動を認識するための場、考える機会が十分に提供されている。

また、次に示す第2次基本計画が目指す2050年の将来像は、持続可能な札幌の都市像を表しており、本方針の基本理念で掲げた「みらい」の札幌を具現化したものでもあります。

第2次基本計画における将来像

- ◎ 市民一人一人が積雪寒冷地における生活のあり方を工夫し、改善し続けることで、将来にわたって自然の恵みを守り、札幌らしい豊かな暮らしの文化が根付いている都市
- ◎ 産学官民が協力して、地球温暖化対策や生物多様性の保全、持続可能な資源循環など、国や地球規模での環境問題の解決に率先して取り組み、国内外にその取り組みと魅力を発信している都市
- ◎ 北海道の豊富な自然エネルギーや資源を活用することで、エネルギーや製品の地産地消が進み、環境関連産業が発展した北海道内の経済的循環の中心となることが実現している都市

² 【持続可能な都市】 自然の恵みが守られ、食料やモノ、エネルギーなどが将来にわたって確保されるとともに、人々の暮らしも楽しく、健康的なものであり続ける都市のこと。

3 環境教育・環境学習を行う際に重視すべき点

(1) 自然からの恩恵や命を大切にしている感性を持つ

私たち人間は、地球上でさまざまな自然の恵みを受けながら生活しています。

これからも永遠に地球や自然と共存していくためには、自然との触れ合いや命の大切さ、尊さを感じ、理解するとともに、環境負荷を減らす行動を選択していくことが必要です。

また、地球上の命あるものは相互に関わり合い、支え合って存在しています。

札幌には、手つかずの自然である原始林や、生きた動物を間近で見ることができる動物園などがあり、自然や命の大切さを学ぶことができる環境に恵まれています。これらの自然や施設において、身近な生き物に触れることにより、恵み豊かな環境を大切に思う心を育てていくことができます。

クマやシカなど、人との生活の場が近い動物と共生していくこと、また、他の動物や植物の命を守り育てるために、外来種の駆除や在来種の個体数管理が必要な場合もあることを、バランスよく学ぶことも重要です。

また、ペットを飼うことも人と動物とが共生するあり方の一つであり、動物愛護の精神を養い、心豊かな生活を送ることができるとともに、市民が責任を持ってペットを終生飼養³することで、命の大切さを身近に学ぶことにもつながります。

(2) 体験により実感を伴う学習をする

経験や生活に即さない学びや、実感を伴わない学びは、具体的な行動には結び付きにくいものです。

特に子どもの頃に体験した驚きや感動などは、生涯における環境に対する価値観の形成に大きな影響を及ぼします。動物などの生き物との触れ合い、自然の中での体験は、環境の大切さを五感で体感（触れる・見る・聞く・嗅ぐ・味わう）し、環境を大切に思う心を養い、人格形成のためにも貴重なものです。

環境教育の実践においては、知識の一方通行に終始させるのではなく、気付きを引き出し、協働経験を通じた双方向型のコミュニケーションによって、学びを深めていくことが重要です。

その際、自分の世界と違った世界をつなぐという視点が重要となります。人は人とのつながりの中で知識を得て、理解を深め、価値観を形成させていきます。身近な家族や仲間のみならず、ときには、日常や人生の過程で深く接してこなかった人との出会いが、つながりの本質や自身の社会等の新しい価値を発見する一助となり、心を動かす大きな要因にもなり得ます。

体験の内容は、自然体験に限られるものでなく、持続可能な社会づくりを支える現場に触れる社会体験、日常生活と異なる文化や慣習などに触れる生活体験、ロールモデル（模範・手本）となるような人との交流体験も重要となります。

³ 【終生飼養】 動物がその寿命を迎えるまで適切に飼うこと。

こうした体験の学びの実践においては、

- ◎ 学ぶ側が主体であることを十分に意識すること
- ◎ 感性を動かして、自ら考えるというプロセスを設けること
- ◎ 体験した場で自身の考えや学びの結果を共有し、振り返るプロセスを設けること
- ◎ 人の個性や多様性を尊重し、安心して参加できる環境を整えること
- ◎ 特定の結論や価値観に誘導しないように留意すること
- ◎ 自己決定の機会を設け、それを尊重すること

などに配慮することで、これまでになかった気付きや感動を得たり、自尊心や創造力を高めたりすることができます。

なお、持続可能な社会づくりへの参加促進という大きな目的を達成するためには、体験活動を一過性のイベントで終わらせないことも重要です。そのためにも、実践に関わる者が、おのこの実践のねらいの具現化や、実践による効果（意識や行動の変化、創造的な事例の創出等）を可視化し、改善につなげていくことが必要です。

(3) 生涯にわたって継続して学習する

持続可能な社会の実現のために、私たちは、生涯を通じて環境保全の意識を持ち、自ら考え、学ぶとともに、環境負荷の少ない生活を送ることが大切であり、環境教育・環境学習は継続的・持続的に行われなくてはなりません。

幼児期から生涯にわたって、継続的に必要とされる環境教育・環境学習の取り組みを進める際には、市民の学習ニーズを的確に捉えながら、関係部局や関係機関などが連携し、身近な地域で学べるよう支援することが必要です。

(4) 経済的側面、社会的側面も同時に向上させるよう配慮する

かつて、環境保全行動は、経済成長、事業の成長を阻害するものであり、社会の発展のためには、環境保全よりも事業の成長が優先されるという考え方が主流の時代がありました。生産性・効率性を求め続けた結果、社会は豊かにはなりましたが、地球環境に大きなダメージを与えてきたことが明らかになりました。

今や持続可能な社会を実現するためには、環境的側面、経済的側面、社会的側面を統合的に向上させることが必要であるとの認識が一般化し、環境保全を犠牲にした経済・社会の発展も、経済・社会の発展を犠牲にした環境保全も成立し得ず、これらを同時に達成していくことが求められています。

そのためには、環境と経済、社会のつながりを理解して行動し、課題を解決できる人材を増やし、他に広げることが必要です。

また、環境教育・環境学習を行うに際しては、環境保全活動と経済的な成長とのバランスを整えたり、従来の習慣を変えたり、新しい考え方を受け入れたりするまでには時間がかかることを理解し、寛容な態度でその幅を広げていくことが重要です。

(5) 理解度や実践度に応じた働き掛けをする

環境問題について関心がない人から環境問題の専門家として活動する人まで、人々の環境に対する関心度には差があるので、それぞれの対象者の理解度・実践度に合った方法で取り組みを行っていく必要があります。

ア 関心を持つ人・理解する人を増やす取り組み

環境問題に全く関心のない人、意識していない人には、まず初めに、環境問題は自分にも関係があることだと認知、理解してもらうことが必要です。

不特定多数を対象として呼び掛けを行う普及啓発（広報周知）や、関心度の混在する特定多数への情報伝達（学校等で行われる授業など）を通して、環境問題は全員が影響を受ける可能性が高いこと、また、環境問題の原因者にもなり得るという認識を促します。

イ 考える人・実行する人を増やす取り組み

環境問題や環境保全の活動について気付いた人や関心を持つ人には、より深く考えたりに行動に移したりするためのきっかけを提供することが効果的です。

関心度にあまり差がない人を対象として行う普及啓発、研修会、体験会、学習会などの形態で、行動を変える納得感や貢献意識を醸成したり、行動への障壁を下げるような後押しをしたりするような取り組みを行います。

ウ リードする人・広げる人を増やす取り組み

環境に配慮した行動をより多くの人に広げていくためには、優れた環境保全活動を他に知らせたり、他をリードする人を支援したりすることが必要です。

さらなる活動を目指す人のヒントや刺激となるよう、優れた事例を共有したり、優れた活動を表彰したりするなどの取り組みを行います。

また、すでに専門家として活躍している人の情報を他と共有したり、活動の場を紹介したりするなど、その活動をスムーズにするような支援を行います。